

保健医療学部長 × 学生対談

学部が輩出する将来の医療職とは

【学部長】札幌医科大学での学生生活はいかがですか？どんなところに本学の良さを感じていますか？

【山岸】札幌医科大学はより高度な看護を学ぶ環境が整っているため、将来の選択肢が豊富であると思います。また、札幌医科大学の看護学科は1学年が50人という少なさであるため、学科の絆が強く、みんなで協力し切磋琢磨しながら学ぶところが魅力的だと思います。

【関口】札幌医科大学の特徴である少人数教育は本学の良さのひとつだと思っています。毎日のように顔を合わせ、同じ授業を受け、同じテストに向かって協力しながら取り組む中で、学生間でとても良い関係を築くことができていると感じます。また、先生方との距離も近く、充実した学習環境が得られています。

【尾田】作業療法学科は1学年の人数が20人程度と少人数であるため、友人や先生方との距離が近く、それぞれの意見を共有しやすいところが本学の良さだと感じています。お互いの意見を共有する時間が多い分、受動的ではなく能動的に講義を受けることができていると感じています。

本学で学んだこと

【学部長】皆さん少人数教育という点を挙げていただきました。学生間の距離、学生と教員の距離が近いだけでなく、コミュニケーションの深さも本学の特徴だと思います。このような環境の本学でどんなことを学び、どんな成長ができたと思いますか。

【山岸】大学の講義や演習、実習を通じ、看護において正解は一つではなく、その人にとって最善で個性のある看護を考える必要があることを学びました。学年が上がるにつれて、教科書で学ぶ看護に加えて対象者の個性を踏まえられるようになった点に成長を感じています。まずは基礎的な知識や技術を確実に身につけることがとても大切だと思います。

【学部長】正解が一つではないという気づきは大きいと思います。ひとつではないという気づきは、対象者の個性を理解し寄り添うという保健医療職の基本的「き」を山岸さんが身につけたということだと思います。学年の進行に応じた大きな成長だと思います。関口くんはいかがですか。

【関口】まずは理学療法を学ぶにあたっての基礎となる解剖学、生理学、運動学などを学び、それから理学療法について実技的な内容も含め学習を進めてきました。暗記のような学習だけでなく、課題に対して答えを出していく過程も多く繰り返し、特に、課題解決のための「考え方」を少しずつ身につけることができていると思います。

【学部長】本学で学んでいたあなたらしい回答が嬉しく思います



理学療法学科 第4学年
関口 慶大
Sekiguchi Keita
茨城県立水戸校/教員高等学校出身

保健医療学部長に聞く

学部が輩出する将来の医療職とは



保健医療学部 学部長
教授 片寄 正樹
Katayose Masaki

(笑)。課題解決のための「考え方」を修得することで、これから向き合う答えが一つではない様々な課題に自身の判断で行動できるようになっていくことになります。本学は自らが多様な課題に立ち向かえる実践力を重視した教育を展開していますので、このコメントに嬉しく思っています。尾田さんはどのように思いますか。

【尾田】何事にも可能性があるということを学べたと思います。例として、患者さんが何気なく言った一言には回復に繋がる重要な可能性が隠れているかもしれないことや、一見何の意味もないようにみえる作業でもリハビリに利用することができる可能性があるということなどが挙げられます。これらの学びから、物事を一方から見るとはではなく、多方面から見ることの重要性を学ぶことが出来たと思います。

【学部長】多様な視点をもつことの大切さを感じたのですね。可能性を広げるのも狭めるのもその感受性なのかもしれませんね。大きな学びだと思います。

研究の意義

【学部長】卒業論文についてどう思いますか。

【山岸】研究を通して主体的に問題を発見し深く考える力が身につくことで、今後看護師として根拠をもったより良い看護実践ができると考えます。また、自己の成長のみならず、看護に携わる人により多くの



看護学科 第4学年
山岸 結
Yamagishi Yui
札幌月寒高等学校出身

研究が行われることは看護の質の向上につながると思います。

【関口】課題が与えられることの多いそれまでの学習と異なり、自分で考えて課題を見つけ、その課題について深く考える貴重な機会だと思います。この大学での学びの集大成でもあり、臨床の現場に踏み出すはじめての歩のような位置づけだと感じています。

【尾田】自分の関心があることについて、納得いくまで突き詰めることが出来る貴重な機会であると思います。自分が決めたテーマに沿って研究を進めていくため、責任や不安が大きく大変に思うこともありますが、それ以上に自分の興味を伸ばすことが出来るなどの楽しさがあると感じています。

【学部長】保健医療が向き合う課題は多様ですね。みなさんが学んでいる看護学、理学療法学、そして作業療法学という専門的視点を背景に、保健医療の実践をとおしてこれからも持続的に関心のある研究課題に気がついていくものです。卒業論文の作成プロセスで、これらの課題に向き合い、科学的に対処していく方法を修得いただいたと思います。

私たちが目指す、これからの地域医療

【学部長】最後になりますが、みなさんが目指すこれからの地域医療のありかたはどのようなものでしょうか。

【山岸】超高齢社会となったいま、医療は介護や福祉等と連携して人々の地域生活を支えていく必要性が高まっていると考えます。様々な健康レベルの人が慣れ親しんだ地域で安心して生活するため、医療と生活の両方を支える看護師の役割は重要であると思います。また、COVID-19感染症が流行しているなか、地域全体の健康を守るためには、病気の治療・回復だけでなく、予防の視点もより大切になると感じています。

【関口】これからの地域医療は、コロナ禍を経た環境の変化が大きく影響すると思います。新型コロナウイルスの流行は、リモートワークやオンライン授業など、外出を必要とせず生活が送られるように生活を変化させましたが、地域医療においては、オンライン診療などを活性化させ、マンパワーを削減するともいえる動きを大きくしました。一方、コロナ禍では改めて人々とのつながりの重要性が広く認識されたと感じます。そこで、これからの地域医療はテクノロジーの発展とともに、「人のぬくもり」のような、地域医療において失ってはいけないものを改めて考えていく必要があると思っています。

【尾田】「住み慣れた地域でその人らしく最後まで暮らす」ことが当たり前にできるようにすることが理想であると思います。そのためには、患者さんの生活や価値観を理解し、患者さんに必要な機能や環境を評価し、それらの機能を落とさないように予防を進めること、そして機能が低下したとしても、他の手段を考え、対象者が今までの生活スタイルの継続を諦めることがないように支援していくことが大切であると考えています。

【学部長】みなさんの着眼点は本当に素晴らしいですね。超高齢社会、コロナ禍などの社会課題にあわせSociety 5.0など社会環境の変革も目まぐるしくなっています。しかし、対象者の個性を理解し寄り添うという保健医療の心は変わることはありません。それぞれの専門性を存分に発揮しながら、これからの地域保健医療を担うリーダーとして活躍してほしいと思います。



作業療法学科 第4学年
尾田 優月
Oda Yuzuki
札幌東高等学校出身